

愛媛大学リーダーズスクールから得たもの①

「振り返り（フィードバック）」とチャレンジ
「クリティカルフレンドから得たこと」

河上えり菜

（愛媛大学 法文学部総合政策学科四回生）

私がリーダーズスクールの授業を受けたのは二回生の後期でした。そのきっかけは一回生の春休みに韓国研修プログラムに参加し、その中で活発に活動しているELS修了生と出会ったことです。意見を言うのも堂々としていて、自信にあふれているように見えました。その学生に「大学生活が何だか物足りないんです。具体的には言えないんですけど、大学生らしいことをやりたいのにつからないんです。」と相談しました。すると「じゃあリーダーズスクールに挑戦してみるといいよ。色んな分野で活動している学生が集まっているからいい刺激になると思う。」そうアドバイスされました。私はすぐにELSを受けてみようと思いました。

ELSには学部学科学年を飛び越えてさまざまな学生がいました。中には他大学から学びに来ていたり、社会人や高校生までいてその熱心さに大変驚きました。ELS生の

多くは大学に入ってからさまざまなことに挑戦するような団体に入っていて、その経験を聞くだけでもとてもたくさんのお話を聞くことができました。例えば留学生と日本人の交流のきっかけづくりに取り組む団体に所属する学生は、他人の意見にきちんと耳を傾けることができ、その意見にたとえ反対意見でも理解するように努力し相手が不快にならないように自身の意見を述べることができ、そういった力を持っていました。恐らくその団体の留学生と交流し経験した中で得ることができたでしょう。私は「こんな学生がいたんだ！」と毎回の授業が驚きと感心の連続でした。そういった友人に出会い、お互いに切磋琢磨する関係が続いています。私たちは「クリティカル・フレンド」と呼び合っていますが、お互いのために良い部分も悪い部分も言い合えるようなそんな友人関係にはなかなか恵まれることはありません。

ELS講師である恩師からの教えはここでは書ききれないほどありますが、ひとつ選ぶとやはりリーダーシップ論についてです。リーダーは理念を持つべし！理想を掲げるべし！例えばプロジェクトを行うときに行き詰ってしまったとして、そのチームはどうするでしょうか。チームでやっている以上必ず目的がありその先にはチームの理

想があるはず。その理想を追求するために理念が必要であり、チームが行き詰ったときにその理念に立ち返ることとまた新しい目標なり指針ができてきます。良いチームはそうやって動いていくのだと教わりました。

私は大学の中で学内向けのテレビ番組を作る団体に所属しています。一回生から所属しており三回生からその団体のリーダーを務めることになりました。ちょうど私がリーダーになった頃、上回生と下回生の間で大きなトラブルがあった後で部内は分裂した状態でした。私は絶対にE.L.S.でのことを生かしてやるんだと意気込んで、私の理想や理念を部員に伝え積極的に部員全員と関わっていかうと努力しました。この団体を良くしていく、そういった気持ちで取り組んでいきましたが、今思うと私は団体が抱える根本の問題に向き合おうとせず自分の考えばかりを部員に押し付けていたのかもしれない。

サークル活動をする学生には二通りの学生がいます。自分の最大限の力で活動をする人と自分のできる範囲で、サークル活動以外のこととバランスを取りながら活動する人です。まして大学生ともなれば大事なものの優先順位は人それぞれ違います。学業・アルバイト・恋人との時間・友人との時間・一人での時間……。それまでサークル活動が第

一だった私にとって、部員との温度差から次第にうまくいかなくなりリーダーとしての信用を失いリーダーを交代することになりました。

私はこの失敗で、長期にわたって大学の授業さえ全く何も手につかなくなるほどに落ち込んでしまいました。私の人生において最大の試練でした。しかしこの時期を乗り越えることが出来たのは、間違いなくE.L.S.で出会ったクリティカル・フレンド達のおかげです。失敗を受け入れることができなかった私に、「失敗しても悩んで落ちるところまで落ち込んだらいいんだよ。立ち上がるのを待ってるからさ！」そう言っ受けて止めてくれ、何もできなかった自分を肯定してくれました。その言葉があったからこそまた立ち上がることできたのだと思います。この経験を経て、「私流落ち込んだ時の立ち直り法」、「私流気分をあげるリフレッシュ法」、「私流失敗しそうになった時の先手打ち法」、などさまざまな術を身につけました！しかし一番思い知ったのは、仲間が本当に打ちのめされ傷ついた時に自分が何をしてあげられるかということです。「してあげよう」と思っても本当に落ち込んでいる人には結局何もしてあげることができません。何かできたと思うのは自己満足に過ぎないと思います。しかし、ただ仲間寄り添って

あげることができるんだということです。それは、遠くに
いようが近くにいようがその距離は関係なく、その人の存
在を受け止めて肯定してあげるだけでいいと思うのです。
リーダーとして最もやってはいけないのは、人を無視する
ことです。今思えば、私は人の言葉、都合、価値感など、
無意識のうちに無視してきたのかもしれない。どんな状
況にあっても、きちんと「見る」ということがリーダーに
とって必要なことであると肌で感じて学びました。その後
私は、その団体に一メンバーとして復帰することができ、
新しいリーダーを支えながら良い団体に成長できるように
貢献しています。

ELSを終えて今でも心の中でずっと自分に課している
ことがあります。「常にチャレンジし続け、異文化のフィ
ールドに積極的に取り組む」「常に振り返り、フィードバ
ックを忘れない」という二つのことです。

私はこの七月にオーストラリア・ブリスベンで行われた
アジア太平洋学生支援協会国際大会 (APSSC) に参加し
ました。ここでは、アジア太平洋地域の学生・教職員が、
大学教育や学生支援に関わる様々な課題について一緒に考
え意見交換を行いました。私たち ELS 代表は、ELS の
取組みについてポスターセッションで発表しました。この

学会への参加を通じて英語という壁にぶつかりましたが、
言語よりも「伝えようとする思い」が大切なのだと感じま
した。世界中に友人が増え、英語という困難にも立ち向か
っていく力が生まれました。また、過去の失敗から学んだ
ように、このプロジェクトでも自身の弱さや問題点がた
くさん見えてきました。自分自身でも何度も振り返りを行
い、一緒に参加した仲間からも良い面、悪い面両方のフィ
ードバックをもらいました。ELS を修了した仲間からの
フィードバックには、いつも私を成長させてくれるヒント
がたくさんつまっています。

私が大学に在学する期間もあと少しになってきました。

オーストラリアでの学会参加だけでなく ELS の仲間とは
多くのイベントを共に運営し、学習会等へ参加してきまし
た。ELS の仲間に出会っていなければこんなに濃い大学
生活を送ることはできなかったでしょう。まさに入学時に
夢に描いていた大学生活、それ以上の価値ある経験の数々
です。これから先、どのような職業で社会に貢献していく
のか、まだ今の段階ではわかりません。しかしどんな時も
困難に挑戦しつづけようと思います。「ELS が終わって
からが本番だ！」先生方がよくそう仰っていました。そ
の意味が最近になってやっとわかってきたような気がしま

す。私はこれから迎える試練のたびに「さあまたELS本番だ！」とそう思い続けていくことでしよう。

愛媛大学リーダーズスクールから得たもの②

「Be alert (常に敏感であれ)」の心掛け

高田康信

(愛媛大学 法文学部総合政策学科三回生)

①愛媛大学リーダーズ・スクール(ELS)の授業を通じて

私がELSの授業を受講したのは、大学一年生の後期でした。当時、お世話になっていた先輩方が私にとっていつも輝いている存在で、いつか自分も先輩方のようになりたいて考えたのがきっかけでした。実際に受講してからは、自己分析や、リーダーシップを生かすための合宿、受講者自身が講師となり、他の受講生に対して行う個人セミナーなど内容がとても濃いものでした。また、授業外で集まることも多く、同期生同士のつながりはより一層強くなりました。その中で私が一番大変だと感じたことは、異なる意

見をまとめることでした。

例えば、ELSの授業の中盤に行われる合宿では、グループでひとつのセミナーを作り、他の受講生に対して実施する経験をしました。その準備の中で求められたのは、それぞれが言うべきことをしっかりと伝えて、それをまとめて、形にすることでしたが、なかなかメンバーのスケジュールが合わず、全員がそろうことが難しい状況でした。メンバー同士がお互いに顔を合わすことができない中で、それぞれが好き勝手の発言を繰り返して、グループが分裂してしまうこともありました。この体験を通して、時間は限られていても、しっかりと話をするこの大切さを学びました。

では、しっかりと話しをするためには、どのような働きかけが必要なのでしょう。私は、まず、場の雰囲気を作ることだと思いました。特に、最初の段階で、明るく、和やかな雰囲気を作ること、相手に安心感を与え、後の話し合いや作業をスムーズに楽しくできるのではないかと思います。そして継続的にかかわり続けることで、信頼関係が生まれ、目的、目標を共有することで、組織としての方向性も確認でき、結束が生まれるのではないのでしょうか。

合宿でのセミナー準備の経験からは、時間管理の重要性についても認識しました。私達は、よく「忙しい」という

言葉を使ってしまいがちです。しかし、それは自分で自分を忙しくさせているだけにすぎず、時間を作ろうと思えばいくらでも作れるのだと思います。また、時間管理がしっかりできている人は、どんな場面でも信頼される人になります。これは、リーダーシップに限らず、社会で生活する上で大事なことだと痛感しました。

② ELSを受講してからの私の活動(具体的な体験を通して)

ELSを受講し終えてから、私の考え方は大きく変わりました。特に自分の所属している組織に対する考え方は大きく変わり、組織への関わり方も大きく変化しました。私の所属している組織は、主に愛媛大学の留学生、日本人学生そして地域の方を結ぶことを目的とした組織で、主要な活動として、毎週一回「インターナショナル・チャット・ルーム」という一時間半ほどのイベントを行っています。そのイベントは主に一年生と二年生が担当するのですが、学期に二、三回それぞれが責任者となりイベントを実施しなければなりません。そのために約三週間前から準備をします。ひとつのイベントは五名程度で作り上げるのですが、学部も違うため、なかなかスケジュールを合わせる事が難しい状況もあります。そのような状況の中で私が行っ

たことは、空き時間や放課後などを上手に使って話し合いや作業を行い、参加できなかったメンバーにはリーダーが直接会い、しっかりと情報共有を行い、意見を聞くことでした。また、問題や意見の衝突があった際は、双方の意見だけでなく、第三者にも意見を聞いて客観的に考えるように努力をしました。また、メンバー同士で食事にかけるなどして、お互いのモチベーションを高めました。

仕事の分担、後輩指導、組織全体の仕事などと仕事の量が多くなり、ときには大変な時もありましたが、そのようなときは、仲間が相談に乗ってくれ、助けてくれました。このような信頼関係を築くことができたのも、常日頃、コミュニケーションを取ることを心がけ、お互いを理解する努力をしていたからだと考えています。今は、三年生となりイベントを担当することもなくなりましたが、後輩のことやこれからの組織のことについて、後輩や仲間と相談し、組織の活動が更に発展するように日々奮闘しています。

また、私は、人と話すことが好きで、特に今は自分とは文化背景の異なる人と話すことに興味があります。そこで、ここ数年は、長期休暇になると外国へ行きます。今年の夏休みもフィリピンに五〇日滞在しました。その中で心がけていたことは、ただ観光をするだけでなく、現地の文

化に触れ、現地の人と話すことです。しかし、慣れない場所です。初対面の人と話をする場合、緊張してどのように話しかけたら良いのか分からなくなることがあります。そんな時、私はいかに相手の心を開くことができるかについて考えます。そして、安心感を与え、自分を受け入れてもらうために、常に相手の表情や言動に注意を払い、最善の働きかけを探るのです。

外国に行つて感じることは、自分から積極的に行動しない限り相手は振り向いてくれないということです。今回のフィリピンでの滞在でも、お国柄だと思いますが、彼らは私に優しく接してくれました。しかし、少し立ち入った話をしようとした途端、彼らは口を閉ざしてしまいました。

そのような状況でもあきらめず、時にはジョークを交えて相手を和ませ話しやすい雰囲気を作りました。その後、お互いが笑顔になり、距離が近くなり、対話を深めることができました。これらが可能になったのも、ELSで学んだ「Be alert. (常に敏感であれ)」という言葉に常に意識して行動したからだと思えます。

③ 今後どのように活かしたいか

私には、「世界中の人を笑顔にしたい」という夢があり

ます。これはフィリピンのスモークーマウンテンというところを見て思ったことです。そこで見た人々は、ゴミの最終処分場に住んでいて、ゴミを拾い、それをお金にして生活をしています。生活環境は良くなく、健康や教育に関する様々な問題を抱えています。しかし、そのような状況の中でも彼らは常に笑顔でした。その笑顔の意味を知りたくて、私が彼らに問いかけると、彼らはこう言ったのです。

「笑顔はコミュニケーションの円満のため」。この言葉を聞いたとき、私は彼らを心の底からの笑顔にしたいと強く感じました。実際私に何ができるかは分かりませんが、ELSで学んだことやその後の実践で培った力を必ず活かせると考えています。

私は大学で、国際関係学を学んでおり、現在はフィリピンの政治について勉強しています。特に、貧困層に対して政府がどのような政策をとり、その結果何がもたらされたかについて詳しく学んでいます。これらの学びを通して、世界の貧困をなくすために何ができるか模索していきたくて考えています。貧困を無くすための手段はいくらでもあるでしょう。それらの中で自分がベストと思う方法を見つけるためにも、今は自分をしっかり見つめ、身近な人を笑顔にすることを心がけながら、様々なことに挑戦していきたい

たいと考えています。

【まとめ】

今回寄稿した学生を例にとれば、河上さんは、「クリティカル・フレンド」というスタイルによる他者の協力を得ながら自らを振り返り、自分なりの成長手法を獲得することができたようである。「クリティカル・フレンド」はELSの合言葉であることは前述したが、人は自己認識が深まれば成長する動物であり、「ジョハリの窓」のとおり、人は自分自身のこととさえ、自ら気づくことのできない領域がある。それを知り得るためには他者の協力が不可欠となる。それにより自らが知り得る自分、すなわち自己認識が深まり、他者への関わりも強まる。これが「クリティカル・フレンド」の有効性であり、まさに、河上さんは、「クリティカル・フレンド」によって成長した典型だと言える。

次に、高田君は、「Be alert(常に敏感であれ)」という、リーダーに必要な素養に気づいたことで、自らを成長させることができた典型である。この言葉もELSでは日常的に使われているが、「Be alert」は常に自らの周りの人物や環境に敏感な状態を保つことを意味しており、コミュニケ

ーションを取っている最中も相手の心の動きを掴もうとする感性が重要となる。高田君は、他者とコミュニケーションを取る際も相手の言葉の裏にある心の動きに配慮する手法を修得し、それと同時にタイムマネジメントを行うことで、より「Be alert」な状態を作り出している。そうすることで、リーダーシップを効果的に発揮できるからである。

彼らのように、ELSでは同じプログラムを受講しても、金太郎館のように同じ成長を遂げるわけではない。リーダーには複数のタイプがあり、自らに合ったタイプのリーダーシップを使いこなすことが大切である。そのためには、己を知ることからスタートすることになる。全学的なリーダーシップ・プログラムは多様な学生が存在し、一つの方向性に導く手法を取ることは有効ではない。それと同時に、一人の教員で対応することも難しい。多くのモデルとなるスタッフや内容、手法を導入することにより、学生自身が自らに相応しい知識、スキル、態度の修得を可能とすることがカギとなる。スタッフにとっては、相当の労力が必要となるが、それに見合った成果が期待できることも付け加えておきたい。